



Title	南朝の歌壇とその行くへ
Author(s)	島津, 忠夫
Citation	語文, 18, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68502
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

南朝の歌壇とその行くへ

島 津 忠 夫

一

『新葉集』や『李花集』の評価をめぐることは、戦時中に於て川田順氏の『吉野朝の悲歌』に見るやうな激情的な説はともかくとして、すでに『日本文学大辞典』の説明あたりから、ずつと今日まで、その歌風は二条派の流れを汲んでゐるので、おほむね平板であるが、戦乱の中に処して悲憤の感慨が表れてゐるといつた定説が、殆ど無批判に踏襲されてゐて、戦後自由な立場から、十分に検討されてゐるとはいへない。

二

『新葉集』は、その序文にもあるやうに、元弘より弘和まで、南朝三代五十年間の作を集めたものであるが、その五十年の間には、南朝の歌壇にも大きな変遷があつたといへる。

その後醍醐天皇の御代は、まだ南朝の歌壇といふべき特殊な存在はなく、『新葉集』には、その元弘の頃からの作を集めてはゐるが、実際に南朝が成立するのは、延元元年十二月、(註一)天皇が吉野に潜幸されてからであり、延元四年に崩御になるまで、吉野では同三年九月十三夜に内裏に於て、天皇はじめ近臣が集つて月の三十首

歌を催されてゐるにすぎない。(註二)しかも、その南朝の歌壇が、大覚寺統は二条派を、持明院統は京極冷泉派をといふ鎌倉時代の兩統迭立以来の關係から、二条派の歌風に立つ事は至極當然であり、一方貞和二年(正平元年)北朝に於て擢進された『風雅集』が、京極冷泉派の歌風に立つ事も又當然であつた。ところが、二条派の爲世や爲定は、後醍醐天皇の吉野潜幸後も、京都に残つて北朝に仕へ、しばらくは不遇をかこつてゐたが、爲定は足利尊氏と巧みに關係をつけて、次の『新千載集』では、京極冷泉派を退けて、その撰者となり、以後の勅撰集は、二条派が牛耳つていくやうになるのであるが、その間の事情は、井上豊雄氏の「南北朝時代における歌壇の動向」(註三)といふ論文に明解にとかれてゐる。

南朝も後村上天皇の御代となつて、その歌壇も漸く活潑さを加へ、百首歌や歌合等の催が、しばしば行はれてゐるのであるが、たとへば、正平八年内裏で行はれた千首歌は、『新葉集』にとられた二十首の歌から見ても、

野辺遠み春の心ぞつながれぬうかべる雲の跡を見るにも

をしほ山神世もきかぬ紅のうす花さくらいまさかりなり
中院入道一品

前中納言爲忠

あひおもはば見ざらむ物か百城の花も千とせの春のさかりを

後村上院御製

などの二条派末流の平板な歌ばかりで、或は、二条為藤の子の為忠あたりが指導的な役割を果たしてゐたのではなかつたかと思はれる。

この南朝の歌壇の風潮は、正平二十年の内裏三百六十首歌に見ても、

うつし植ゑて君がみはしの花さかりひさしかれとや風ものどけき

前中納言実秀

高砂の松をうき身の命にてつれなき中に世をやつくさん

妙光寺内大臣

せめてそのうき名なりとも名取河逢ふと云ふ瀬のなどなかるらん

後村上院御製

など展開を見せてゐない。つまり後村上天皇の御代の南朝の歌壇

は、乱世にもかかはらず、しば／＼千首歌、歌合などが行はれ、殊

に天皇自身百首歌を為定に送つて勅撰集入集の熱意を示されたりし

てをり、宗良親王が『新葉集』の巻頭に後村上院御製を据ゑ、その

歌数も自作の多くを「よみ人しらず」としてまでも、後村上院の御

製を第一位の百首にしてゐる点などから、吉原敏雄氏もすでに想像

されてゐるやうに、(註四)『新葉集』の撰進の意図は、早く後村上

院にあり、宗良親王は、その遺志を達成されたのではないかと考へ

られるのであるが、その歌壇は、なほ二条派の歌風を一歩も出ず、

南朝独自の歌風は生み出されてはゐない。

(註一) 本稿に限り南朝の年号を用ひる。

(註二) 『新葉集』の詞書による。

(註三) 『国文学研究』第五輯所収。

(註四) 『概観短歌史』

三

南朝の歌壇が漸く独自の歌風を示すのは、宗良親王が長い遠江・信濃らの転戦の末、賀名生の行宮に引きあげられた長慶天皇の天授元年以後の事になる。すでに南朝の勢力は、すっかり地に落ちて、わづかに余燼を保つてゐるに過ぎなかつたが、天授元年には、内裏に於て、天皇以下二十人の五十首づゝ五百番の歌合が行はれて、宗良親王が判者をつとめ、翌天授二年には、天皇、春宮、関白が、つゝいて師兼、經高、長親らが、千首歌をよんでをり、遂に弘和元年に『新葉集』を撰進せられる事になるのであるが、この頃の南朝の歌壇は、宗良親王を中心に、戦乱の中から生まれて来た南朝独自の歌壇の様相を示して来るのである。

宗良親王は、為世の女、贈従三位為子を母とし、為世の孫為定を歌の師として、はじめは専ら二条派の影響のもとにあつた。『李花集』中の為定におくつた歌の詞書に、『風雅集』の撰者達を「あらぬさまなる撰者ども」といつてゐるのは、恐らく公蔭や為秀をさすのであらうが、為定を当代第一の歌人と考へ、その撰者にもれた事を、「此の道もなくなりぬる」とまででなげいてゐるなど、あきらかに二条派の立場に立たれてゐる。その後も為定とはしば／＼歌の贈答をかはし、為定が巧みに足利氏に接近して、北朝の歌壇にその地歩を占めていつたにもかゝはらず、為定歿すときいては、為定の子の為遠に、哀傷五十首をつかはし、

わがみちのたえぬときけばなき跡のかなしき中になほぞ悲しきなどとよんでゐるのは、北朝の歌壇の事情に通じなかつた事であら

うが、やはり歌の家としての二条派の權威を尊重されてゐるのであり、その歌風も、もとより二条派の風体で、建徳二年までの作を集めた『李花集』の巻頭から三首をあげてみて

春たつといふばかりにはかすめども猶雪深しみよしのの山

久堅の天の岩戸ぞかすむなる神代に帰る春のしるしに

今朝よりは霞ぞ閉づるあまつ空雲のかよひち春やきぬらむ

など、巻頭歌はともかく、次の二首などは、二条歌風の保守的な主情的な立場を最もよくあらはしてゐるものといへる。しかし『李花集』の中には、非常に長い詞書をもつた歌が多くあつて、それらは親王の長い転戦生活をものがたり、いはゆる「悲歌」として、戦時中とかくさわがれたものであるが、やはりかういつた転戦の生活の中から、漸く二条派の保守的な類型的な歌風を脱して、晩年の風格をつくり出す契機が見られるのである。

『新葉集』巻七離別の歌、

しなのの国までも又年月をくりて侍りしに行宮の御しきもおぼつかなく侍りしかばあからさまに芳野にまいりてやがてくだり侍らむとせし時内裏にて人々百番歌合し侍りに旅の心を
老の波又たち別れいな舟ののぼればくだる旅のくるしさ

は、詞書の示す通り、内裏に於ての百番歌合の旅の歌であるが、この歌を『新葉集』に入れるにあつて、わざ／＼くだ／＼しい詞書をつけたのは、この歌をさういふ背景をもつて理解してもらひたかつたからで、いひかへれば、題詠も実感との交錯に意図があつたのである。同じく『新葉集』巻五の

をば捨山ちかく住侍りし比夜ふるるまで月を見て思ひつづけ侍りし

これにます都のつとはなき物をいさといはばやをば捨の月

は、宗良親王千首の「山月」の題詠で、その跋の中に、千首の中から春夏秋冬恋雑それぞれ一首づつ抜き出した自讃歌であるが、千首歌の「山月」題の歌をよむにあつて、実際の経験に思ひを馳せて作つたものであり、(註二)『新葉集』に入れるにあつては、あへてわざわざ前記の詞書を附して実感をもたせる事により、一そうこの歌の価値を認めさせようといふのであつた。この実感に中心をおく所に、宗良親王の長い地方生活の後に作りあげた二条派の伝統とは全く異つた晩年の独自の風格を見出す事が出来よう。

この宗良親王の晩年の風格が、南朝独自の歌壇を形成したのであるが、親王に親しく接して歌の道を求め、親王をたすけて『新葉集』の撰にもあつた花山院長親が、後にあらはした歌論書『耕雲口伝』は、その本質をよく語つてゐる。これは

こゝに信州の中書王ときこえさせ給ひしは(中略)この道のほまれ幼齡より世にかくれなく、晩年の風格あめがしたためし少くおはせしかば、朝夕親近して、この道を問ひ奉りし程に、日ごろのあやまち水のごとくに消え、雪のごとくにとけて、露ばかりの力量も出来にけるにや、後には新葉集撰定のことをさへ委附せられ給へりしかども、いくほどなくてまた雲水漂泊の身になりて、そのありし世にきゝおき、まなびなれにし事ども、みな隔生のごとくになりしかば、此道の秘事口訣なども跡かたちをおぼえず、しかはあれども師伝をはなれて、心にうる一すちは、いまだ人にかたる事はなけれども、後のかたみに聊をいひとくべしとある通り、長親をとほした意見ではあるが、宗良親王の説を祖述したものであり、更には南朝の歌壇の特色を語る唯一のものといへ

よう。口伝に対する自由な態度も、やはり乱世の中で育つた南朝歌壇の特色ではあるが、

あけはまた秋のなかばも過ぎぬべしかたふく月のをしきのみかは

定家（新勅撰集）

のやうな歌を「常に本としてまなぶべき体の歌」とし、

はるの夜のゆめのうきはしとだえして峰にわかるゝよこぐもの空

定家（新古今集）

のやうな歌を「まなびてわろかるべき体」としてゐるなど、その初心に対する態度は、宗良親王から受けついだと思はれ、二条派の説く所とかはりはないが、その「まなびてわろかるべき体」としてゐる歌も、「これらは上手の風骨をみて幽意微詞おもしろし」といつて、その価値を十分認めてゐるのであり、しかも宗良親王のこのくれもとはんことはよもぎふのすゑばの風の秋のはげしさ

（註二）

をあげて

此一首古人にも及びぬべし。後には新葉集にいれり。これまたまなびがたき処あり。このたぐひ古来多けれども、心肝にそみたるによりて、これを書くなり。所詮此姿などはかやうによまむと、

はじめて稽古せば、生をへだてゝもさらによみにすべからず。

といつてゐる事は、十分注意すべきであり、宗良親王が、結局かういふ『新古今集』に通ずるやうな歌に達せられ、一つの極地として、親王も長親も、高く評価してゐたといふ事は、南朝の歌壇の性格を考へるに非常に重要であり、南朝の歌壇が、もはや二条派の及びもつかない所で、全く無関係ではあつたが、かへつて「あらぬさまなる撰者ども」といはれた『風雅集』などの冷泉派に近いもの

が、いつのまにか作り出されつゝあつたのである。事実『五百番歌合』の中には

風はやみじぐるゝ雲もたえゝにみだれてわたる雁のつら

御製（一九一番左勝 含点）

もしは焼く煙のすども見え初て空よりはる浦の朝霧

前大納言光有（二〇五番左持 含点）

きよみがた霞やふかく成りぬらん遠ざかり行くみほのうら松

春宮大夫師兼（一四番古勝 含点）

むかし思ふ心づからやかすめるとなみだにかこつ曉夜の月

権中納言実興（五二番左勝）

など、さきの正平年間の歌には、見出す事の出来なかつた、二条派の歌風を脱皮した歌が見られるのである。

（註一）『李花集』にとられてゐないから、信州でよまれた歌

を、逆に千首に利用されたと考へるべきでない。

（註二）『新葉集』恋四の歌、『新統古今集』にも「よみ人しら

ず」としてとられてゐる。

四

ところが『新葉集』を全般的にながめるならば、すでにのべて来たやうな南朝歌壇の特色は、十分にはあらはれてゐない。そこには従来いはれて来たやうに、二条歌風を主体とした平板な歌風が目につき、たゞ長い詞書をもつた雑や哀傷の部の歌に、その感情の流露した作を見出すにすぎない。これは撰集の体裁を調べるには、あまりにも弘和の頃の南朝の勢力は微力であつた。宗良親王の御入山により、行宮での和歌の催は、たしかに活潑になり、実質的にも独自の特色をもつに至つたが、南朝の勢力は、吉野の奥、賀名生の宮にわ

づかに余燼を保つてゐるに過ぎない情勢であつて、元弘の変から南北朝の動乱を描いた『太平記』を見ても、このあたりを敘したいはゆる第三部は、もはや南北朝対立の舞台から退いて、武士方の内紛を追ひ、南朝はわづかに宮方といふ一つの小さい勢力としてしかとらへられてゐない(註一)のは、第一部第二部と作者を異にするといふ点もあらうが、すでにさういふ考へ方が天下にひろがつてゐた事を示すものであつたともいへる。

『新葉集』の撰進は、かういふ情勢のもとで続けられていつた。『嘉喜門院御集』のやうに撰集の為に求められた家集が、他にもあつたかも知れないが、『李花集』などは最も重要な資料となり、釈教歌などは、もつぱらその配列のまゝに入集をしてをり、近き頃の五百番歌合、住吉社歌合、長慶天皇に奉つた千首などは勿論のこと、その他度々行はれた歌合、百首歌の類の残つてゐたものが資料となつたのであらうが、戦乱の為に散逸したものも多く、その資料は決して十分とはいへなかつただらうと思はれる。しかも作者は、三代五十年間の南朝の君臣に限り、為世や為明の歌を詞書にしてゐるなど、あきらかに北朝の勅撰集に対して、南朝のみの歌集を作らうといふ意志が見え、このやうな限られた条件の中で、四季離別蜀旅神祇釈教恋難哀傷賀と部立を立て、二十卷一四二〇首の歌をえらんでどこまでも勅撰集の体裁を整へようとしたのである。しかし「よみ人しらず」の九六首の大半が宗良親王の作である(註二)事は、『新葉集』が勅撰の形を整へる上に、かなりの無理をしてゐる事を示してゐるのであつて、その歌風の上で、宗良親王の晩年の風格を、集の上に明瞭にうち出すなどといふ事は、所詮期待出来る事ではなかつた。

『新葉集』と南朝歌壇の歌風との間に見出されるこの矛盾は、更にいへば撰者宗良親王の立場にもあつた。宗良親王が二条派の歌風から出発し、長い転戦生活の末、賀名生に入山される頃を契機として、かへつて冷泉派の立場にも近い晩年の風格を形成された事をさきのべたのであるが、それは実は長親ら若い歌人たちに刺戟されての事であつたやうだ。長親の千首に加点された後に附せられた長文の消息の中に(註三)

今度千首殊勝言語道断之事とこそ申度候へ、先に聊み及候し御歌どもには、悉引かへられ候、いつのほどにかくもかはり候けるやらんとまで返々覚候、余の事に別の作者など交て候やらんとまで申度候も、余にけしからぬやうに候、御風情旁おもふやうに候へば、うれしとも申ばかりなく候、例のこはくしき事ども取分候て、御尋など候へば、能能御謹慎候やらんと覺て候、毎歌ゆくくとやさしく、句ごとに幽玄を本とせられて候へば、先歌の本様と存候

などと、長親のめざましい進境に感激の言葉を綴つてゐるのであり、

梅が枝に去年のやどりを尋ねなりいまだ旅なる鶯の声 (初鶯)
春のくるあととぞみゆる水くきのをかのやかたの雪の村消

(岡残雪)
つれなくてやまぬばかりぞ郭公名残あり明の空の一声

(晩郭公)
など、後に『為兼集』の中に混入するやうな作品に合点を加へ、「梅が枝に」の歌には、和歌には珍しい長点までもつけてをり、いとど猶月かとぞみる久方の中なる里にさける卯花(卯花似月)

の歌に、「中なる里定家卿詠出候んいかゞと存する人もや候はんずらん但愚意にはくるしからじとおぼえ候」とあるなど、たしかに親王自らかういふ長親の歌風を十分理解し、長親又さういふ親王の立場を晩年の風格と見てゐたものと思はれるのであるが、親王の立場には、なほ二条派的な面を多分にもつてゐた。「幽玄」といふ言葉にしても

ふる里の秋の色まで床しきは雲にかり鳴夕暮のそら（夕初雁）
の歌に「第四句不優候、異風にはかやうの事を申出候て幽玄とやらん、余にかやうの事沈思候へばことばも異風になり候歟」とか
今は又かよひしこまの跡たえてなげきぞまさる前のたなはし

（寄馬恋）

に「此二句も余に秀句本になりて幽玄なる所なく候」とか評する言葉からも察せられる通り、正徹らのいふ「幽玄」とは異つて、「ゆうゆうとやさしく」と同義に用いてゐるのであつた。更に

月のもるねやの板まに露みえて寐覚夜深きよもぎふの宿（曉露）
「第五句今はくるしく候はねども、かやうにこのみ候へば、自然に異風に成候なり」

垣はなるまさきのかつら色つきぬとひくる人を今やつながん（墻紅葉）「結句あまりに誹諧めき候」

木葉ちり物淋しかる夕暮を我とひがほに山風のふく（夕落葉）
「第二句打まかせては可詠詞にては候はぬか、間がほ又よむべからず候よし申候」

などの言葉からは、長親の新風に対して、かへつて牽制の側に立つてゐるとも考へられ、

古郷の八本の桜おもひ出よわがみし春は昔なりとも（古郷花）

暁のね覚の床に露ぞおく枕も今や秋をしるらん（初秋暁）
などの歌に合点を加へ、『新葉集』に入集させてゐるのである。

しかし、とにかく長親らの若い力が宗良親王を動かし、親王の長い転戦の体験の中から生じた自由な実感的な詠風とふれあつて、それが、南朝唯一の准勅撰集『新葉集』には、十分に發揮される事が出来なかつたらみはあるとしても、たしかに南朝独自の歌風をつくりあげた事は注目すべき事実といはなければならぬ。

（註一）永積安明氏『太平記』及び『太平記論』（『文学』昭和三十一年九月号）参照

（註二）岩佐正氏「新葉和歌集の研究」（『国語と国文学』昭和九年六月号）参照

（註三）図書寮蔵竹柏園旧藏本、宗良親王の評点に耕雲の奥書あり、宗良親王の長文の書簡を附す。

五

元中九年閏十月五日、後龜山天皇が、北朝の後小松天皇に御位を譲られて、いはゆる南北朝の合一が実現するのであるが、すでにその頃には南朝の歌壇は、形式的には消滅してゐた。『新葉集』の撰進後、宗良親王はまもなくなくなられ、すでに長親も「雲水漂泊の身」となつて離れてしまつてゐた。

しかし、形式的には南朝の歌壇は消滅しても、南朝五十年の間に形成されて来た独自の歌風は、主として花山院長親——耕雲明魏を通じて伝へられた。耕雲の伝記については、岩橋小弥太氏の詳細な考証があるが、（註一）京都の花山院家を通じて、義満の和歌の添削を受けるやうになつた耕雲は、義満の子の義持の深い尊信を受

け、応永二十二年には、小河邸に於ける十四人百首づゝの歌を合はせた七百番歌合に判をする事になつた。(註二) しかも、この頃の耕雲の名声は高かつたものと見えて、伏見宮でも、応永二十六年九月十三夜の和歌百首を歌合にして耕雲に判を求めてゐる。(註三) かういふ情勢の中で、或人の懇望を受けて『耕雲口伝』をあらはす事になるのであるが、その内容は、すでに見た通り宗良親王を中心とする南朝の歌壇で培はれたところであつた事は注目すべきであり、耕雲が、長慶天皇の『仙源抄』を義持の為に書写したり、(註四) 耕雲千首を大内盛見の為に書写したり、(註五) この頃の歌壇に耕雲を通じて南朝歌壇の歌風が浸透していく姿を知る事が出来る。かくして永享十一年『新統古今集』が飛鳥井雅世によつて撰進されるにあつては、その中に「よみ人しらず」とはしてゐるが、たしかに『新葉集』が一つの撰集の資料として無視する事が出来なかつた事を示してゐるといはねばならない。(註六) しかも、義持が耕雲に絶大の尊信の念をもつてゐたのに対し、後崇光院の方は、さきの歌合の耕雲の点も、多くは持であつたといふ御不満足で、改めて飛鳥井雅縁に判をさせたといふ事実もある通り、専ら耕雲の歌風は、義持を中心とした世界で行はれ、耕雲の説が、南朝の歌壇でものした歌風に加へて禅宗の影響を受けてゐる事は、『耕雲口伝』『七百番歌合序』『耕雲歌卷』(註七)等によつて知る事が出来るが、その説は反二条派の点が多く、かへつて冷泉派の禅僧正徹とは、『徹書記物語』に定家の歌の解釈をめぐる正徹と耕雲の意見のちがつた話が記されてゐて、面識もあつたやうで、その説も一脈通ずるものがあつた。またいはゆる『為兼卿集』は、すでに諸家がいはれてゐるやうに為兼の歌集でなく、(註八) 耕雲、正徹の歌をはじめ多く

の中世歌人の歌を含んでをり、次田香澄氏は「単なる私撰集として諸歌人の歌を撰集したものと見做すべきである」といはれてゐるのであるが、それにしても耕雲及び正徹の歌が他の歌人に比して圧倒的に多い事は注目すべきであり、それが『為兼卿集』と名づけられてくるところに、これは又図書寮蔵の『詠十五首和歌』が応永二十一年天満天神に奉納した耕雲、宋雅、為尹の名号和歌に為兼卿卅三首を加へて一写本とし冷泉為広に伝はつてゐる事ともあはせて、耕雲の歌が、京極家の闕將為兼、冷泉派の正徹と並べて、とにかくまぎれるだけの歌風の一致があつたといふ事が出来よう。

更に興味のある事は、南朝の『五百番歌合』の写本が、図書寮の谷森本の奥書によれば

本日、此歌合雖秘本、年来依為御所望令書写進献者也、永正十三年孟春下旬 冷泉大納言入道曉覚在判

とあり、まさに南朝の歌壇が、かへつて冷泉派の歌風に近い事をのべたが、こゝに冷泉派の政為が、この歌合の一本を蔵してゐるといふ事実であり、政為にはもはや冷泉歌風のおもかげは見られないとしても、(註九) 注目される事実である。

かくして二条派から出発した南朝の歌壇が、長い戦乱の生活によつて独自の歌風を作りあげ、それがかへつて冷泉派の歌風に近づいてゐるといふ事は、中世和歌史上の一つの興味ある展開といふ事が出来よう。

(註一) 『国語と国文学』二十六年十一月号、なほ古く岩佐正氏の「耕雲小論」(『国語と国文学』九年一一二月号)がある。

(註二) 図書寮蔵『七百番歌合序』

(註三) 『看聞御記』による。

(註四) 群書類従本奥書。

(註五) 図書寮本奥書。

(註六) 岩佐正氏「新葉和歌歌集について」(『国語と国文学』十

八卷四号) 参照

(註七) 天理図書館蔵

(註八) 岩佐正氏「入道大納言為兼郷集は果して誰の歌集か」

(『文学』十二年三月号)、次田香澄氏「為兼郷集の成立」(『文学』十二年十二月号) など参照。

(註九) 拙稿「冷泉歌風のゆくへ」(『国語国文』二十八年六月

号) 参照 (三一・一一・六) —— 住吉高校教諭 ——